

ルドルフ・シュタイナー神秘主義における 宗教性

西井 美穂

本発表では、十九世紀末から二十世紀にかけてドイツで人智学 *Anthroposophie* を提唱し、普及させたルドルフ・シュタイナー (Rudolf Steiner 一八六一—一九二五) の思想を、宗教性という観点から分析するものである。人智学は感覚で捉えることのできない世界を現実と見做し科学的に捉えていくとする「精神科学」に基盤を置くものである。こうした思想が、一般には神智学などの神秘主義と混同されることもあり、いまだ思想面における厳密な検討はなされていない。その背景には、シュタイナー自身が「誰にでも分かる表現」を用いていないことや、「精神科学」に基盤をおく神秘主義への人々の警戒心、あるいはシュタイナーを信奉する人々が周囲との溝をつくってきたことなどがある。戦前の日本へのシュタイナー思想の受容の過程をみても、彼の著作で取り上げられたのは主にシュタイナーが神智学徒として活動した中期の『神智学 *Theosophie*』、『神秘学概論 *Die Geheimwissenschaft im Umriss*』などの神秘主義的著作であり、初期の『自由の哲学 *Die Philosophie der Freiheit*』などの哲学的著作は取り上げられていない。思想研究においては、こうした現状は今でも変わらない。

しかし、シュタイナー思想は、果たして神秘主義という枠に閉じ込められるものであろうか。彼は人智学を科学思想と見做

していた。宗教と距離をおく「科学」としての思想を構築しようとした。彼が自らの思想を宗教と切り離されることを切望したのは様々な理由が考えられるが、科学への志向は強い。しかし、その「科学性」とともに彼の思想は宗教性を包含しているのである。

『自由の哲学』は、シュタイナーが哲学的思索を集中的に行った十代後半から二十代にかけての集大成であり、この著作の中で彼は西洋的思惟の伝統的特徴である二元論を批判し、一元論 *Monismus* を提唱した。とりわけカントは二元論を固定させたとして批判されたのであるが、カントが理性に限界を定めたという点にのみシュタイナーは異を唱えたのである。人智学の目的は、人間精神を「真の認識」に導くということにあった。人間の認識を正しい方向に導くためには理性・精神が中心とならなければならない。精神界 *Geist* を聖なる世界とし、人間が自己を認識することで *Geist* に達し、*Geist* から直観を通じて叡智を魂・心性 *Seele* の核である自我 *Ich* で獲得するという構図を彼は描いていた。その際、シュタイナーが採用した方法は、ゲーテの自然認識の方法であった。ゲーテは、自然を観察することでその源であるメタモルフォーゼ (変態) する生命に達したのである。シュタイナーがゲーテの認識方法を採用し入れたのは、感性界の中に精神界が存在することをゲーテが証明したと考えたからであった。彼はこの方法を精神に応用し、生命を観る自我を自らの認識で創造しようとしたのである。一元論を提示したのはこのためであった。

しかし、この一元論で見出されたのは、果たしてゲーテが獲

得した生命だったろうか。彼が自己認識により獲得したのは、主観の中で語る客観をみる自我であった。Geistの流入で変容する自我は全我 All Ich になるのである。しかし、かつての自我は個我として残されている。低次の自我と高次の自我が存在することになる。主観の中の客観も決して融合はしない。つまりすべては分化され、細分化され、独立し、それが有機的に繋がりあっているという構図なのである。これらすべてを行うのは上位にいる Geist なのである。その Geist から保障されることで人間が神化されるという図式がみてとれる。Geist はどこまでも人間の外にある。神聖なる精神世界 Geist を信奉する宗教性がシュタイナーの思想を貫いているのである。

井筒俊彦の神秘主義論とその意味構造

澤 井 義 次

イスラーム哲学と東洋思想の世界的な碩学として知られた井筒俊彦は、晩年に「東洋哲学」の構築を目指した。今回の発表では、井筒が哲学的思惟の基底をなすと捉えた神秘主義に注目し、彼の神秘主義論の意味構造を考察してみたい。

まず、井筒が「神秘主義」をどのように考えていたのかを明らかにしておきたい。彼にとって神秘主義とは「日常的存在体験を超えた次元での存在体験」であった。意識の深層を拓くことで、はじめて存在の深層を把握できる。したがって、自らそれを体験したことの無い人には理解させることができない。と

ころが、人間はどうしても言詮不及なものを知解によって論考し言語化しようとする。このように井筒は哲学的思惟と神秘主義が「互いに断ちがたい宿命のきずな」によって固く結ばれていると説き、神秘主義の本質的特徴として、神秘主義的な存在体験と哲学的思惟の融合、根源的な結びつきを考えた。神秘主義に関するこうした理解の仕方は、本質的に彼の初期の著書『神秘哲学』（一九四九年）から遺著『意識の形而上学』（一九九三年）に至るまで変わることがなかった。

井筒は神秘主義を次の二類型に分けた。それらは有神論的（あるいは人格神的）な神秘主義と無神論的（あるいは非人格神的）な神秘主義である。こうした彼の神秘主義理解はルードルフ・オットーが説いた神秘主義の二類型、すなわち「神の神秘主義」(Gottesmystik) と「魂の神秘主義」(Seelenmystik) に対応する。井筒はオットーの神秘主義論に言及しながら、これら二類型の神秘主義は対蹠的にもみえるが、本質的に同じで優劣はないと言う。意識を多層的構造体としてモデル化し、表層意識から深層意識への広がりの中で捉えた井筒は、これら二類型の神秘主義が同じ意味論的構造をもつと考えた。

また彼は神秘主義の主要な特徴として次の三点を挙げた。第一の特徴は、経験的世界（リアリティ）が多層的構造をなすという点である。「現実」と呼ばれるリアリティは垂直的方向に広がって、存在領域の多層的構造をなしている。第二の特徴として、彼は意識の多層的構造を挙げた。この点は神秘主義の名に相応しい特徴であるが、人間の意識はリアリティと同じ多層構造をもつという。意識は表層から最深層に及ぶ垂直に重なる